

乙 貞

第112号 通巻20巻第3号
2000年9月1日 発行

守山市立埋蔵文化財センター
☎・FAX 077-585-4397

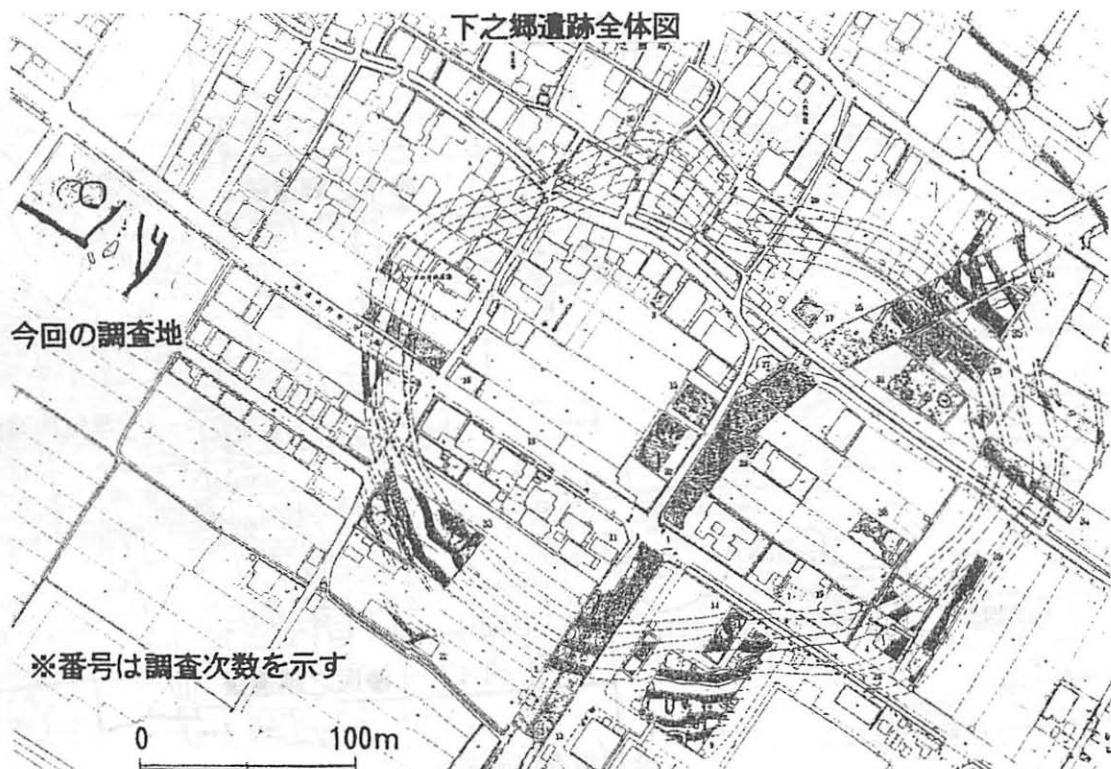
〒524-0212
守山市服部町2250番地

☆環濠の外側で新たに区画溝等を発見☆

1. 下之郷遺跡42次調査(下之郷町)

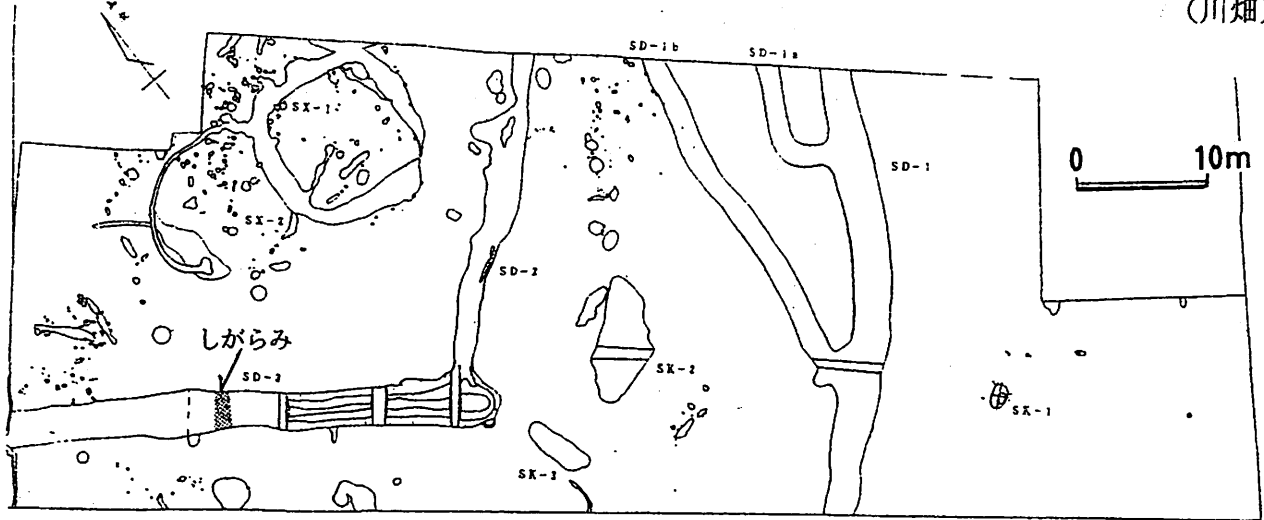
今回調査した場所は、過去の調査で明らかにされた3重環濠の外側約100mの地点にあたります。これまで、この地点は遺跡から外れているものと想定されていましたが、発掘した結果、次のようなことが明らかになりました。

- ① これまで弥生集落の西端と理解されていた3条の環濠のさらに100m西に条溝や区画溝が確認されたこと。(このことから、下之郷遺跡の規模が西側に200m程広がりました。)
- ② 条溝の外側には、直径20cm程の丸太杭が並ぶ柵跡が確認されました。
- ③ 区画溝はL字に曲がっており、内側から柱跡(建物跡?)がたくさん見つかかり、弥生人が居住していた場所と推定されます。また、重複する状態で方形周溝墓が確認されていて、住居が廃絶した後には墓域となっていたと考えられます。
- ④ 区画溝からは、多量の弥生土器や木器が発掘されました。木器には、鍬などの農具や杓子などの生活用具があります。



⑤ 区画溝の底から「しがらみ杭」が発見されました。「しがらみ杭」は11本と4本の2列の木杭列が大きな溝を横断するかたちで設けられていました。これは、ここに水があったことを証明するものであり、水位の調整や貯水などの役割を果たしたものと考えられます。

(川畑)

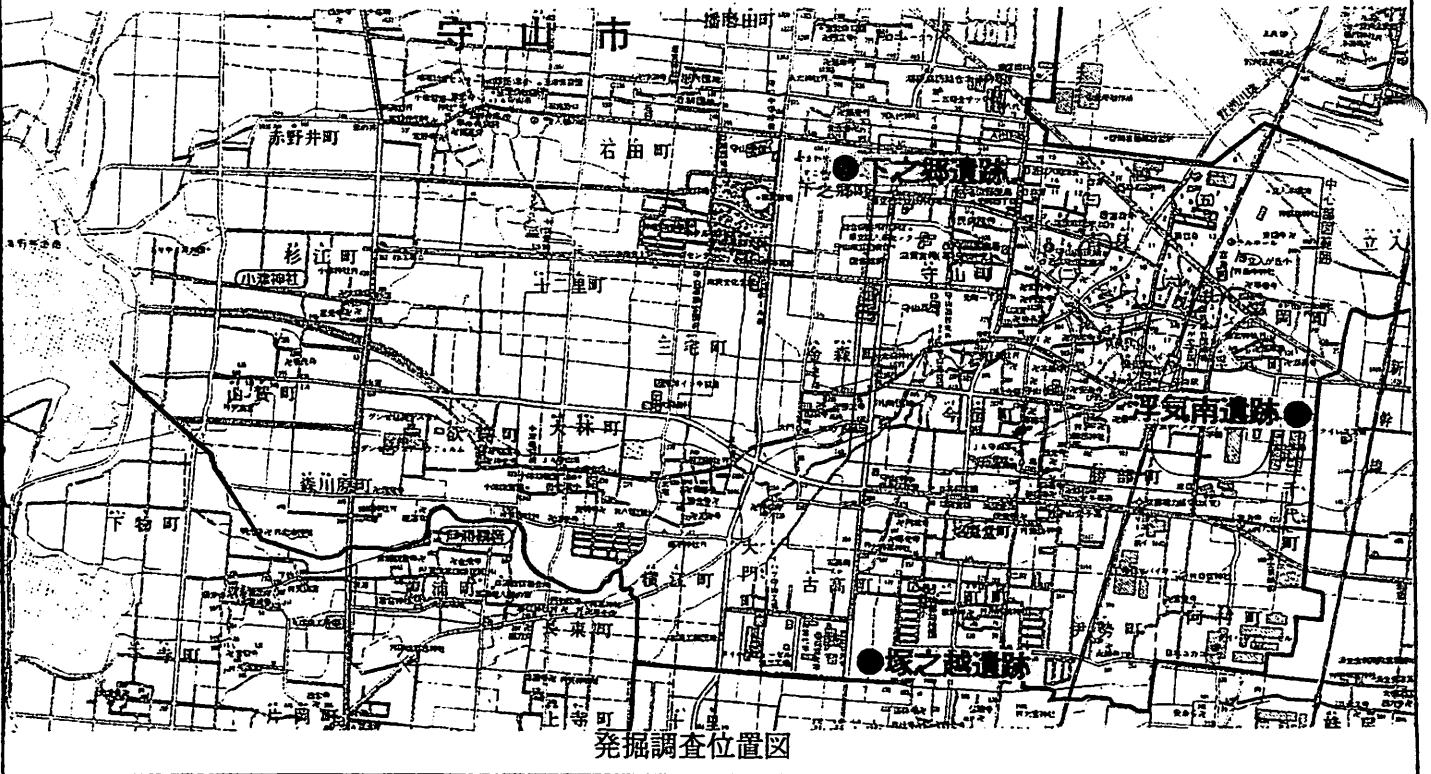


下之郷遺跡42次調査遺構全体図

(検出遺構の一覧)

遺構	幅	深さ	備考
SD-1	3 m	約 1 m	条溝
SD-1a	1.5 m	未確認	条溝
SD-1b	1.8 m	未確認	条溝
SD-2	1.5 ~ 2.6 m	約 1 m	区画溝
SD-3	3.0 ~ 4.0 m	1.6 ~ 2.0 m	区画溝 (排水の機能?)

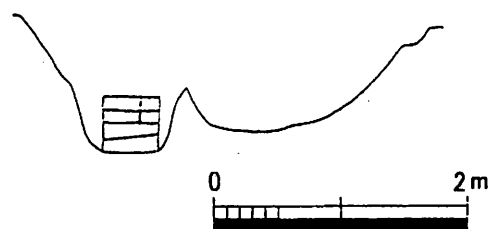
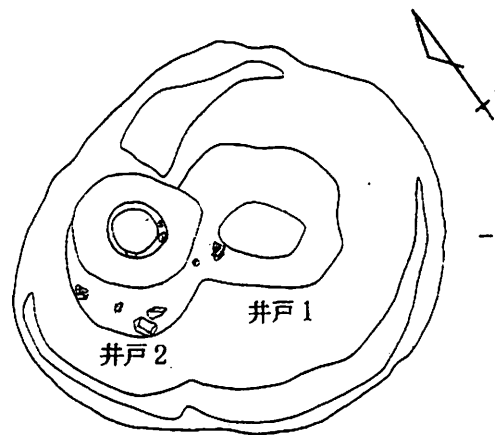
遺構	長辺	短辺	備考
SX-1	東西 9.6 m	南北 9.8 m	方形周溝墓 (連結)
SX-2	約 10.6 m		円周状の周溝墓 (連結)
SK-1	2.0 m	1.2 m	浅い土坑状
SK-2	10.2 m	4.6 m	柵と関連するものか?
SK-3	5.4 m	1.8 m	通路状
柵	直径 20 cm 前後の柱が条溝に沿うように並んでいる。		



発掘調査位置図

2. 塚之越遺跡15次調査（古高町）

前号で報告した後の調査で、井戸が3基見つかりました。第2地区の井戸はなかなか水脈にあたらなかったのか、深く掘り込まれています。また、井戸の埋土の中間地点で土器や木片が多く見つかり、利用されなくなってかなり埋まった後、ゴミ捨て場になっていたのかもしれません。第5地区からは右図のように2基並んだ井戸を検出しました。井戸1を壊すような形で、井戸2がさらに深く掘り込まれているのが、底付近で確認できました。何らかの理由で井戸1を廃棄し、水の出が良かったからかすぐ脇に井戸2を掘ったと考えられます。また、井戸2は井戸枠に曲物まげものを使っています。いずれの井戸も出土した遺物から、鎌倉時代につくられたと考えられます。同じ時代でも形や深さ、井戸枠の有無など若干の違いがあり、当時の人々の生活を考える上で興味深い資料です。 （大岡）



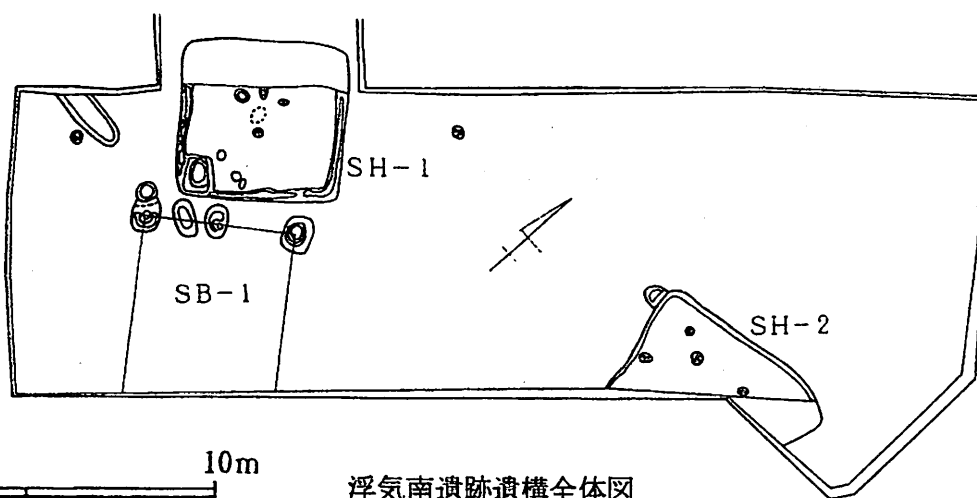
井戸1・2平面図

3. 浮気南遺跡の調査（浮気町）

宅地造成工事に先立ち、道路建設部分を対象に調査しました。調査の結果、古墳時代前期と見られる竪穴住居2棟（SH-1・2）と掘立柱建物1棟（SB-1）を検出しました。竪穴住居は一辺4～5mの方形住居で、床面から15cm程が残存していました。このうち、SH-1は明確な支柱穴は確認できませんでしたが、ほぼ中央で炉を検出しました。また、壁際で周壁溝しゅうへきこう、南側コーナーで貯蔵穴ちようぞうけつとみられる土坑を検出しました。遺物は周壁溝と貯蔵穴から砥石といしが出土したほか、古墳時代前期の土器が少量出土しました。中にはベンガラとみられる赤色顔料を表面に塗った壺の破片もあります。

これらの遺構には重複がないことから、比較的短期間に営まれた集落ではないかと考えられます。

（小島）



浮気南遺跡遺構全体図

守山の遺跡～弥生時代編 1

昭和53年、野洲川改修工事に伴う服部遺跡の発掘調査で弥生時代前期の水田跡が見つかり、大きな話題になりました。この発見によって、野洲川流域でも弥生時代前期に確実に稲作を行っていたことが実証されたのです。服部遺跡の水田は、一区画の面積が $10\text{m}^2\sim 200\text{m}^2$ と小さいもので、俗にミニ水田と呼ばれています。この水田は緩やかに傾斜する低湿地に立地しており、約260面にもおよぶ水田が発見されています。起伏に富んだ地形に合わせて畦をつくり、水をうまく配れるように工夫されていたようです。

服部遺跡の調査以後、小津浜遺跡（山賀町）、寺中遺跡（矢島町）、烏丸崎遺跡（草津市）、霊仙寺遺跡（栗東町）などが調査され、野洲川下流域の弥生時代前期の遺跡の様子も少しずつ明らかになってきています。これらの遺跡は琵琶湖岸や低湿地といった場所に立地しており、常に水を絶やすことのできない水田を維持・管理していくのに適していたと考えられます。ただ、洪水など水の脅威は常にあり、人々と水とのたたかいが肥沃な沖積平野で繰り広げられていたことが想像されます。

近年、平安女学院大学建設に伴い中島遺跡（三宅町）が調査され、弥生時代前期の多量の土器と石器が出土しました。土器は壺・甕・鉢・壺蓋などの器種がそろっており、石器もサヌカイト製の石鍬や木を伐採したり、加工したりする石斧類も豊富にあります。おそらく、当時の弥生人はこうした道具を駆使して周辺の開墾を進めたのでしょう。

弥生時代の稲作については、その起源や伝播ルート、開始時期など様々な考えが示されており、考古学の最もホットなテーマのひとつでもあります。近年では、DNA分析などの科学的分析方法も取り入れられています（弥生時代中期の下之郷遺跡出土の稲粃もこの方法で分析が進められています）。もしかすると、守山の遺跡からも弥生時代の稲作の謎にせまる調査成果が得られるかもしれませんね。

